32

ジョウジ・ワシントンの死について

藤倉一郎

一七九九年一二月の寒い冬の日、三人の医師はもがき苦しむ病人の傍らで沈痛な時を過ごしていた。下僕のシールはやつれたワシントンの身体をさすっていた。三年前に大統領を辞していたワシントンは呼吸困難で瀕死の状態であった。

医師はクレイク（六九）、ブラウン（五二）、ディック（三七）の三人で錚々たるメンバーである。

ワシントンの病気の経過は

十二月十三日（金）風邪をひいて声が嗄れた

十二月十四日（土）

am二・〇〇　呼吸困難

am六・〇〇　発熱、咽頭痛、嚥下困難、呼吸困難、発声困難

下僕のリアがクレイクに往診を依頼

am七・三〇　瀉血一二オンス（三五〇ml）

酢入り蜂蜜を飲んで呼吸困難がひどくなる。

am九・三〇　瀉血一八オンス（五三二ml）

am一一・〇〇　瀉血一八オンス（五三二ml）

うがいをする。窒息しそうになる。

pm三・〇〇　ディック到着瀉血不要と議論

瀉血三二オンス（九四六ml）

pm四・〇〇　ブラウン到着

カロメール、吐酒石服用

pm五・〇〇　部屋を歩き、椅子にすわる。

まもなくベッドに戻るが呼吸困難

pm八・〇〇　手足に湿布、喉に湿布をする。

状態はますます悪化。

pm一〇・二〇　死亡

ワシントンの死亡の日、ジャーナリストのコバットに殺人罪で告発されていた瀉血の唱導者ラッシュは勝訴したが、ワシントンの瀉血は有害でなかったかという疑念が広まった。ワシントンの死は彼の主治医たちによって、もたらされたものだという考え方が国内はもとより英国

の学者によっても又新聞にも表明された。なぜ二三六五mlもの瀉血を一二時間以内におこなったのか。このような治療が本当に有効なのか。

ワシントンの状態は炎症であり、炎症は組織の腫脹を伴う。しかし主治医は今日の抗炎症剤を持ち合わせていない。主治医は瀉血により皮膚や局所の血管攣縮をきたし気道の腫脹もとれるものと考えたのであろう。カロメールの下剤で脱水し、アンチモニーで発汗して、湿布で更に効果を高めた。しかしこの処置で血液は粘稠になり脱水症状と循環血液量の減少で血流は低下し抗炎症作用は更に低下して、状態は悪化するばかりであったろうと考えられる。

しかしワシントンの葬儀にたちあった友人のブライアンは扁桃炎にかかって、多量の瀉血により救命された。

クレイクはその後二度と瀉血について発言しなかった。ブラウンも発言しなかった。

ディックは瀉血を否定し、ブラウンを批判し、クレイクを完全に否定した。しかしディックは後に強烈な反対論から、瀉血の有効性を認める発言をするようになり、ラッシュとともに瀉血のエキスパートと目された。

ディックは後にアレキサンドリアの市長となり、ワシントンの誕生日を祝日とすることに奔走し、ワシントンの記念碑の設立に一役かった。一八二五年死亡した。

（一期会藤倉病院）